

2008年6月10日

ミシェル・ダリシエ

東京大学グローバルCOE

慶應義塾大学法学部講師

「共生のための国際哲学教育センター」(UTCP)

大阪大学文学部講師

### 三木清の「構想力の論理」(要旨)

Résumé : MIKI Kiyoshi (1897-1945) constitue l'un des représentants de la réception de Bergson au sein de l'École de Kyôto, après NISHIDA Kitarô (1870-1945) et TANABE Hajime (1885-1962). Il cherche à expliquer l'effort d'invention qui travaille le cœur de l'« intuition » bergsonienne, à la lumière d'une négativité issue de la « profondeur » même du réel. Fortement influencé par Marx, il conçoit l'essence dialectique de cette « mouvance » au niveau d'une « logique de l'imagination », qui repense la théorie des « images » et la doctrine kantienne du schématisme.

Abstract: MIKI Kiyoshi (1897-1945) is one of the agents of the reception of Bergson within the Kyoto School, after NISHIDA Kitaro (1870-1945) and TANABE Hajime (1885-1962). He tries to explain the strain of invention that is working in the heart of Bergsonian “intuition”, in terms of negativity coming from the “depths” of reality itself. Deeply influenced by Marx, rethinking the theory of “images” as well as the Kantian theory of Schematism, he conceives of the dialectical nature of such a “movement” at the level of a “logic of imagination”.

レジュメ : 三木清(1897-1945)は、西田幾多郎(1870-1945)と田辺元(1885-1962)の後で、日本におけるベルクソン思想の受容の一つの代表者として見做されている。彼は、現実そのものの「内奥」に生まれた否定性から、ベルクソンにおける「直観」の中心に働いている勢力を解説するように努めている。マルクスの影響を受けた三木にとっては、そのような運動の弁証法的本質を、カントの図式論、且つベルクソンのイマージュ論を考え直すような「構想力の論理」として考察しているのである。

## 1- 直観論

### 1- 直観の「仕事」

直観というと、甚だ安易なものと考えられるか、それとも単に情意的なもの、全く天才的なもの或は神秘的なものと考えられがちである。現にベルグソンの哲学に対しても屢々そのような批評が下されているのである。しかしながら直観は本来決して単にそのようなものではなく、非常な労苦の結果得られるものである、それに達するには極めて厳格な方法的な訓練が必要である<sup>1</sup>。

### 2- 直観の直接性

沢山の科学上の知識が集められ、その組み合わせに多くの工夫を重ね、そうしてその努力が殆ど全く徒労に帰したように思われる時、一瞬にしてこの幸福な綜合が得られるのである。ポアンカレは、彼がフィックス函数に関する最初の論文を書いた時のことを追想して、この発見は、彼が旅行中の或る日散歩に出かけるために乗合馬車に乗らうとして、その踏段に足を触れた瞬間、一その時には数学上の仕事のことは忘れていたのに、一突然彼の頭に浮かんできた<sup>2</sup>。

### 3- 忘却

### 4- 聴診

### 5- 西田の解釈

### 6- 直観の弁証法

---

<sup>1</sup> 『三木清全集』(MKZ) 第10巻 (岩波書店、1987年) 517.

<sup>2</sup> MKZ, 10, 517-518.

## 2- カントの批判と「構想力の論理」

### 1- 三つの制限の問題

### 2- 時間と空間の問題

その時間はベルグソンに依ると空間化された時間であって、純粹な時間、純粹持續ではない(中略)流れる時間でなくて流れた時間においてである。(中略)物自体が時間の形式を脱しているということは空間化された時間の形式を脱しているということであって、物自体は却って時間そのもの、純粹持續である<sup>3</sup>。

### 3- 外在性

### 4- 努力の優位

### 5- 科学の評価

### 6- イマージュ論の経験論的系図

### 7- 構想力の論理

---

<sup>3</sup>MKZ, 10, 523。

### 3- 三木の政治・社会的なベルクソン哲学の解釈

#### 1- 三木とソレル

#### 2- 三木のベルクソン批判

具体的に動くものは物質に触れて動くもの、行為的なものでなければならぬ。ベルグソンが純粹に動くものと考えたのは却って抽象的なものである。彼に依ると物質は精神に対する「逆の運動」である。(中略)物質は精神の解体である、即ちそれは不動化され、(中略)物質に触れることのない精神は発明的であることができないであらう。単に流れるのみの時間は形をとることができぬ。しかるに生命は形のあるものを作り出す、創造というのは形のあるものを作り出すことである。生命的な形は動的・静的なもの、時間的・空間的なもの、精神的・物質的なもの、要するに弁証法的なものである。単に動くものは動くともいい得ない<sup>4</sup>。

#### 3- なかなか動かない「動くもの」

#### 4- 逆転された図式論

#### 5- 歴史的物質

歴史的物質は表現であり、そのうちには精神が表現されている。ベルグソンは図式は形像を呼び起こす仕事のうちに現在して働き、そして一度形像が呼び起こされると、その仕事を終わったものとして、背後に消え失せるというが、むしろ反対に、図式は物質のうちに形として表現されて生きるのである。物質は精神化され、精神は物質化される。そこに歴史的経験がある。(中略)構想力が考えられる。ベルグソンが「動くもの」というのは物を作る運動ではなかった。彼の直観の哲学は根本において観想的に止まっている<sup>5</sup>。

---

<sup>4</sup> MKZ, 5, 314-315.

<sup>5</sup> MKZ, 5, 317-319.